

Act 25 Excerpt

AITC/ITAC Japan

KANSAI branch

2019.8.15

center

国際演劇評論家協会日本センター
関西支部 演劇評論誌【アクト】



発行人／瀬戸宏 編集人／上念省三・岡田路子
ここには、各稿の一部分のみ掲載しています。
全文は、<https://jonen-shozo.wixsite.com/act25>
でお読みください。（上掲 QR コード推奨）

【再刊あいさつ】

関西支部長 瀬戸宏

国際演劇評論家協会(AICT)日本センター関西支部機関誌『ACT』(『あくと』)は2004年5月に創刊された。今から15年前のことである。その後、紆余曲折はあったが歴代編集長の努力で24号まで発行された。厳しい状況が続く関西演劇界と同様に、『ACT』も諸般の事情でここ数年発行が途絶えることを余儀なくされたが、今回上念省三会員を編集長として25号が刊行されようとしている。

創刊号の編集後記に、私は初代編集長として、次のように書いた。

「AICT 関西支部の性格から、雑誌としては特定の芸術主張はとれない。あえて言えば、「現場」に強い関心を持ちつつそれから独立した「自立した演劇批評の追求」であろう。その対象は、舞台芸術であればジャンルは問わない。東京などの劇団の関西公演も取り上げる。さらに、関西在住の批評家の東京演劇評、海外演劇事情紹介も掲載する。『act』が関西演劇界活性化の一つの刺激剤となることを願っている。」

その後の『ACT』も、ほぼこの道を歩んだといつてよい。雑誌は10号続けば必ずそこから書き手が生まれると言われるが、『ACT』も数は少ないながらも今も活躍する演劇評論の書き手を生み出すことができた。持続は重要であり、演劇の活性化に演劇評論が必要なことも、論を待たない。新生『ACT』が、現在の演劇評論の書き手により多くの評論執筆の場を提供すると同時に、『ACT』をゆりかごにより新しい演劇評論家が育つことを願っている。

飛ぶ魂——大竹野正典 没後10年記念 公演『山の声』を観て

(2019年5月アイホール／伊丹)

岡田祥子(おかだ・さちこ)

「ただいま — 悪いが少し眠らせてくれ」(中略)そのとき私は異様な言葉の力に驚づかみにされ、ぐんぐん空中に浮きあがっていった。猛吹雪のなか雪に半ば埋まりながら檣の天上沢を歩いているはずなのに、気づくと道は乾いた林道となり、さらに気づくと日本海の上空にいるのである。空中浮遊、いやワープしたというべきか。夜の海、眼下はるかにたくさんの灯りがキラキラと輝くイカ釣り漁船の群れが見え、故郷の浜坂の町の上空を、悠々と翼をはためかせながら魂は飛びわたる。町の真中にある生家を見つけると急降下し、懐かしい家のなかをめぐる。家を出ると、妻の花子と出会い、逢瀬を重ねた宇都野神社に向かう。その石段の小暗い闇の向こうは遠いヒマラヤに繋がっているのだ。人生の目標だったヒマラヤの存在の気配を感じながら、しかし今は、魂はささやかな所帯を結ぶ神戸の下町の長田に戻ってゆく。いつもの帰り道を通り、我が家の玄関の前に立つ。妻子の待つ暖かい家に戻ったのである。(写真:『山の声』撮影:藍田マリン)



誰かが今ここで語ってくれている ということ ——ツルコフスキ『マルガレーテ』、

akakilike『はじめましてこんにちは、…』、ピン・チ
ョン『生きづらさを抱える人たちの物語』

(2019年1月ナレッジシアター／大阪 他)

上念省三(じょうねん・しょうぞう)

ぼくがダンスの側の人だからかもしれないが、ダンスは(コンテンポラリーダンスの多くは)身体以外のものをあまり使わず、比較的シンプルで根源的な表現だから他のさまざまなメディアを付加しやすいのではないと思う一方、シンプルだからこそ、スティックでミニマルな方向性が強く、ほかの要素を取り入れにくいという場合もあるだろうと思うが、倉田翠が初対面だろうか、自己紹介しながらおぼちゃんやおっちゃんにバレエを踊ったのは、とにかく美しかった。

それは、倉田が主宰する akakilike の『はじめまして、こんにちは、今私は誰ですか?』での一コマだった。

北京で観た SCOT『リア王』

(2019年6月中国国家大劇院／北京)

瀬戸 宏(せと・ひろし)

しかしながら、私はこの『リア王』になじむことができなかった。俳優は演出の傀儡のようで、俳優の自主性、主体性が感じられないのである。題名の通りこの作品はシェイクスピアの『リア王』に基づいておりその人物が登場するのだが、劇中人物の個性は感じられない。私は、この SCOT『リア王』の舞台から、様式美以外に「世界あるいは地球上は病院で、その中に人間は住んでいるのではないか」という演出意図がどれだけ観客に伝わったか、疑問に思

った。鈴木メソッドは中国では評価が高く、中央戯劇学院でも学生を SCOT に学習派遣させているほどである。俳優の身体訓練としては有効性があるのかもしれないが、今回の舞台を観て、私には SCOT の演技は平田オリザらが試みているロボット演劇が本格化すれば、真っ先に不要になる性質の演技だとすら思われた。

ねばつく街と、海の誘惑——第一回 田畑実戯曲賞受賞作品『ひたむきな星屑』 (2019 年 5 月人間座スタジオ／京都)

藤城孝輔(ふじき・こうすけ)

ひっかかりの残る作品である。わかる部分よりも、曖昧なまま残された部分のほうが圧倒的に多い。まるで本作は、観客が内容を理解したことにして足早に通り過ぎていくことを許さないかのようである。だから観終わってしばらく時間を置いた今も、芝居のシーンが白昼夢のようにおぼろげに頭にまとわりつく。見慣れているつもりで見過ごしていた夜の街並みが、違った表情で目の前に立ち上がってくる。

私は「ひっかかり」という言葉を使ったが、本作の内容に合わせるならば「ねばつき」と言い表したほうがより適切かもしれない。舞台の中央に大きな穴が開いている。劇中で陥没事故を起こす高速道路を模したセットである。

恋愛の河底に眠る政治性 ——『スカイライト』評 (2018 年 12 月兵庫県立芸術文化センター／西宮) 瀧尻浩士(たきじり・ひろし)

行き過ぎた資本主義、サッチャー時代のネオリベリズムは、イギリスにひとつの影を生んだ。その影、キラとムが生きる社会の違いが、ふたりの会話の背後に見え隠れする。ヘアの作品は概して政治的であるが、ヘア自身、党派に属する政治の中のひとではない。政治の外から政治を描く。政治劇そのものでなくとも、時代に生きる人間を描くとき、あらゆる演劇は政治的になる。『スカイライト』も恋愛劇の形式ではあるが、政治的側面を持っている。男と女が、社会性をまとわない素っ裸の生きものであれば、もつと幸福になれたかもしれない。しかし、性別以前に、ひとりの独立した社会的生きものである限り、恋愛することは自ずと政治性を抱えることになるのだ。埋められるはずもないふたりの間の溝を埋めようとして会話し、そして絶望する。

衣装としての裸体と物語的時間 の構築 ——第 2 回京都国際舞踏祭 4 日目を観て (2019 年 5 月 studio seedbox／京都) 番場 寛(ばんば・ひろし)

この日の公演を観て最初に抱いた疑問は氷解したのだろうか。と

もにこれこそ自分にとっての「舞踏」だと思って踊ったそれぞれの作品を通して、外国人のそれと日本人のそれを比較することで舞踏の本質が見えてきたのだろうかかと自問すると、まだだと思わざるをえない。

しかし分ったのは、金亀の踊りに代表される、ひたすら制御することで生身の肉体そのものを見せようとする傾向と、それとは逆に全面的に衣装で身を覆うことで、観客を物語的時間へと誘う INAKI OYRVIDE の踊りの傾向は舞踏に止まらず、コンテンポラリーダンス一般に当てはまる傾向でもあり、今回の舞踏公演はその二つの傾向をより際立たせていたのではないと思われる。

能勢人形浄瑠璃鹿角座の挑戦 ——能勢人形浄瑠璃 淨り月間をみて (2019 年 6 月能勢人形浄瑠璃鹿角座／能勢) 山崎達哉(やまざき・たつや)

そういった活動から、この劇場(淨りシアター)を使って、何ができるのか、来場者をいかに楽しませるかということに腐心している様子が窺えた。人形浄瑠璃を上演する、古典を題材にするといったことは前提としてあるが、それ以上に、上演においてどのような工夫が人を魅きつけるか、ということに尽力しているのであろう。(中略)

このような様々な活動を続けていくためにも、まずは能勢人形浄瑠璃を知ってもらい、観てもらい、体験してもらうことが重要ではないかと思う。こども浄瑠璃出身者でも、進学・就職の後にも町外から参加する人もいという。これから多くの人を巻き込み、劇場(淨りシアター)からの仕掛けや、能勢人形浄瑠璃だからできることで観客を楽しませながら、活動を続けてほしいと期待している。

近年の京都——小劇場環境の動き 坂本秀夫(さかもと・ひでお)

かつて小劇場ブームの時代の小劇場環境というのは、好景気に裏打ちされた企業メセナの時代ではなかっただろうか。そしてその後、失われた 20 年と言われる長きに渡る不況の時代は、公的助成金と公共劇場の時代だったのではと思う。ここ数年、景気のゆるやかな回復基調が続いている。このまま回復基調が進み、失われた 30 年とならなかった場合、次の時代はどのような小劇場環境の時代となるのだろうか。(中略)

この過渡期がどのような方向に動いていくのか、期待しつつ注視したいと思う。

- 会員募集中 当会の詳細については、<http://aict-iato.jp/>、<http://theatrearts.aict-iato.jp/> をご覧の上、興味をお持ちの方は aict.act2018@gmail.com までご連絡ください。
- 原稿募集中 広く舞台芸術に関する評論を、会員・非会員を問わず募集しています。詳しくは上記宛ご連絡いただくか、<https://jonen-shozo.wixsite.com/tapir-p> をご覧ください。
- ご意見、ご感想等も、上記メール宛、お待ちしております。